

---

# ORUGUREIVE BLOOD VAN PAIA SAIN HEARTS」

コアス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ORUGUREITIVEBLOODVANPAIASAINHEA

RTS

### 【Zコード】

Z0985Z

### 【あらすじ】

大都会紅夜町の紅夜明暗学園高等部1年E組に通う主人公園龍寺草魔は幼馴染の委員長達と普通の日々を過ごしていた普通の高校生へ血と身体能力は超人並み。だがある日、ヴァンパイアを名乗る少女との出会いと彼女のやっている争いにより彼のこれまでの日常は非日常へと変わっていく。彼の周りは騒がしくなっていく。

## Episode 1 DEATHSYNTHBLOOD~運命の呪い狂想曲~

どうもコアスです。このオリジナルノベルは@core\_a\_m'sの俺力オ  
スハイジとしてやっていたのからの転載して一部修正しました。  
では

紅夜町

卷之三

ଶାନ୍ତିକାଳ

「オッワアー!? ヤツベえよマジに遅刻するわー。どうするよ俺さ?」

「あー、やつ早くしてしなせよ今まで遅刻して先公に怒られるじ  
やない」

なんかに頼んでいないんさ」

一転勤していつたアンタの母親に頼まれたんだから仕方ないじゃない！アンタがホンツトに馬鹿だから・・

「余計な事を……」

俺は園龍寺草魔「紅夜明暗学園」高等部1年。自分で言つのもなんのだが泣きたくなるような学力壊滅、『社会、国語、理科以外』今まで彼女なし!の草食系男子・・・。唯一取り柄になつているのは不屈の超人的体力と健康過ぎる血だけなんさ・・・。

「でもいくらなんでもこの時間じゃぜつてえ遅刻確定さあー」

「早矢し」

俺の幼馴染の藤倉叶美ときたらしつけのなつてない小型犬の遠吠えのようにつるさいんだよなあ・・・黙つてさえいればまだ可愛げがあるんだけどな・・・ウチのクラスの男子共もこの鬼委員長には1歩も近付こうとしないからなあ・・・

放課後

あれ、アシで今せたるが、たきん?

「なつ・・・なんなのさアレは！？」

俺の頭上遙か上で美少女一人が戦っていた。俺は急いで裏路地に隠

れて事の成り行きを見守った。

「いい加減に諦めて血を吸わせなさいな」

「クツ・・・ま・・・まだよ！・・・まだ・・・諦めて死ぬわけにはいかないのよ・・・」

「往生際が悪いわね。・・・そんなにまだ苦しみ続けたいというわけね・・いいわ！まだまだ存分に悲鳴を上げさせてあげるわ」「やめろおー！」

俺はいつの間にかとつさに飛び出した。すると・・・

ボオツ！ 俺の手から炎が出た。

「なつ！？・・・」この炎は「オルグレイヴサイン」！？あの少年か！？」

チャキン・・

「ハア・・・ハア・・・・」のまま生を終えるわけにはいかない・・・から・・・。「血印術水靈斬結印」！？・・・

「なにつ！？まだ力が残留していたか・・・チツ！覚えとけよ」少女の一人はどこかへ消え去つていった。

「や・・・やつと・・・帰ってくれた・・・。ハア・・・ハア・・・・もう・・・

「ちょ！？」

もう一人の少女はあまりにも傷付きすぎていたために力尽きてしまい落ちてきた。

「・・・イテテ・・・・。オイ、君大丈夫か・・・！？」

俺の運命は声をかけ少女の体の異変に気付いた時から回り始めていつたのだ。

「なつ・・・！？なんなんだこれは！？」

少女の体から出ている血の色が青色だったのだ。

「・・・今はとりあえずこの子を助けることだけを考えよう・・・間に合つてくれよ・・・」

俺は少女を背負いながら全速力で家に帰った。登校、部活、体育以外でこんなに走ったのは久々だ。そして、一晩中つきつきりで看病

した。

（翌日）

「ヤツバ！ああっ、そうだつたw」

気付いたらいつの間にか爆睡してしまっていた。運良く今日は休日だつたので安心した。だがたとえ学校でもこの子を残していくわけにもいかないわ。

「う・・・うう・・・／＼＼＼＼は・・・」

「やつと田が覚めたか。よかつたわあー」

「あの・・・あなたは・・・？」

「んあつ？俺か？俺は紅夜明暗学園高等部一年園龍寺草魔。唯一の取り柄は超人的な体力と健康過ぎる血なんぞ」

「！・・・あ・・・あの・・・」

「ん？なんさ？」

「あの・・・少しだけ・・・ほんの少しだけ・・・あなたの血を吸わせてもらえませんか？力を使い果たしたから・・・。それとあなたなら血の契約の衝動にも耐え切れそุดだから。契約・・キスしてくれださい！」

「はつ！！？」

今なんていったのかなあ？

「ダメ・・・ですか・・・？」

「い・・いや・・・そういうわけじゃ・・・」

「だつたらあなたの望み叶えてあげますから

「望み？」

俺の思考は瞬時によからぬ妄想モードへ・・・よし・・

「じゃあ・・・俺のお姉ちゃんになつてほしい・・・ところのは？・・

「

「いいよ」

「んで・・・君の名前は？」

「あつ・・・すっかり忘れてしまつていきました。私は姫美花。水の血族のヴァンパイア。他の血族達の血印の力を巡る殺し合いに参加

させられることになつたんです。でも私はあまり・・・

「・・・その先はもう話さなくていいんさ・・・」

姫美花お姉ちゃんは今までどんなに苦しんでまた傷付いたのだろう  
か・・・これ以上詮索するわけにはいかなかつた。

「じゃあ血の契約を・・・。「聖水血印の鉈」血現」

チクリ・・・

「ツ・・・・！」

「オイ、大丈夫なんさ！？」

「へ・・・平氣ですでは・・・」

「ン・・・」

俺のファーストキスが交わされた瞬間だつた。  
続

## Episode 1 DEATHZONE BLOOD～運命の血と狂想曲～

どうぞいか？たくさんの感想を心よりお待ちしております。7話まで転載しまでのよろしく。

## Episode 2 「初戦と修羅場！？」

衝撃的な出会いから翌日・・・

「・・・・」

「弟君、早く起きないと遅刻しちゃうよ」

「・・・姫美花お姉ちゃん・・・」

「よしよし、血の拒否反応もなしだね」

「血・・・か・・・」

俺は今日から姫美花お姉ちゃんと学園に通うこととなつた。でも、彼女は普通の人間ではない。水の血族のヴァンパイアだ。これからは彼女の正体を隠しながら生活していかないとならない。

「早くいこうよ弟君」

「あのおー・・・姫美花お姉ちゃん?」

「んー、なにいー?弟君」

「朝っぱらからこんな密着状態で登校するのは非常に危険というかなんというか・・・」

「あつ・・・そ・・・そつだね・・・」

「あつ・・・いや別に嫌とかいうわけじゃなくて・・・」

「いいよ家でターツプリ甘えさせてあげるからね」

「・・・そういうやクラスどになつたんだ?」

「ウフフ・・・それはみてからのお楽しみ」

「・・・嫌一な予感がしたようなしないような・・・」

「ーくるわ!」

「えつ!?敵かよ!?!」

「「血印解放」!—「聖水血印の鉈」具現化!—」  
やんは戦闘モードを解放する!—

「よし俺も」

俺も炎の力を使う。

(前日)

「弟君のその炎は「オルグレイヴサイン」といわれるヴァンパイアが苦手とする血裂の印炎・・・だから敵の動きを一定時間封じられるから」

とかいつてたよな。

戻つて~

「あーら逃げないのねいい根性だこと」

「あなたはどこの血族?私は水の血族の園龍寺姫美花」

「フン・・まあいいわ名乗つてあげる。私は闇の血族の闇羅井月雪。

!あなた契約者がいるのね」

「そういうあなたはいないようね。こっちのほうがあなたより有利よ」

「それはどうかしらね。「血印解放」!!「闇月の双鎌」具現化!

!」「1今だ!「オルグレイヴサイン」解凍!!」

隙をつき炎を解凍させる。

「なんですって!?!この子「オルグレイヴサイン」の持ち主!?!?

・仕方ない・・・ここは退かせてもらつわね

「逃げるな

「バイ

「・・・・ヤツベ学校

「あー!」

（1年E組教室）

お姉さんは年上だし離れ離れになるのは寂しいけど。だが・・・

「オイ聞いたか?草魔」

悪友の黒塚伊理也がなにか騒いでる。それどころか他の男子共も。

「なにをさ?」

「美少女転入生が今日一人来る事」

「・・・・・ものす」一く嫌な予感が当たりそうなんだが・・・

「?なんの話だ?」

よし「イツ等は無視しどい」。

キーンコーン

「転入生を紹介する」

そして予感は的中してしまつた。

「お・・お姉ちゃん！？」

「なにいーーー！」

なんで姫美花お姉ちゃんがよりにもよつて俺のクラスにー？　いや

それどころか・・・なぜー年！？

「私弟君と同い年だよ」

「へつ？」

彼女の身長が178の俺よりも高いからてっきり年上かと思つたのにそういうことかー・・・。

「草魔あー・・・」

「貴様ー・・・！」

男子共が鬼のような形相でにらんできた。

「んげッ！？ま・・・までこれには深すぎる理由が・・・」

「問答無用！いつからだ！？あんな美少女と

・・・別の意味で契約したんだが・・・

「アンタら静かにしなさいな。」

「委員長は黙つてくれ」

「なあんですつてえー・・・

「ひいーーー！」

（放課後）

「あの・・・」

「あれ君は夢中夢雪さん」

今朝のごたごたで紹介できなかつたのだ。

「屋上にきてもらえませんか？」

こ・・・これつて生まれて初めての・・告白？でもこの後予想外な出来事が・・

（屋上）

「園龍寺さんあなたの」と一目見て好きになりました。私とキスしてください！」

「ちよつ・・ま・・・・」

キスされた瞬間の感触が・・・！「これは・・・血の味・・・？まさか夢中さんって！？」

「弟君！彼女は・・・！？」間に合わなかつた・・・

「あら彼とはもう血の契約しちやつたわよ

「闇羅井さんなのか！？」

彼女は偽名を名乗つて俺に近付いてきたのだ。

「あなたのその力がほしくなつたのよ」

ただそれだけの為に俺はキスされた。

「あなた・・・」

それで・・・何！？」の修羅場！？

続

Episode 3 「遙か上がった炎と直やして裏切つ」（前書き）

三話目

## Episodes「湧き上がった炎と血をして裏切り」

「・・・なんであなたがここにいるのよー?」

「あーら悪いかしら?」

「・・・・・」

「いい?あなたは今日から私の奴隸よ」

「はあつ!?」×2

いきなり何を言い出すんだ。つかキャラ違つ・・・ってどうかこの修羅場どうにかしてくれなのさー・・・。

「いい?別に本当に好きってわけじゃないからね」

「・・・・・  
泣」

「ちょっとーあなたみたいな根暗に私の弟君を渡したくないわ  
でも同じ契約者のヴァンパイアが争う気?」

「うぐ・・・・」

「・・・・・」

その日から女難?の嵐そして一人のケンカが始まってしまったのだった。

「アンタ最近雪さんになにをされているのよ?」

言えない・・・。断じてもこの肉食系女にバレたりしたら一緒になつて俺をパシリにしそうだ・・・。

「なんでもねえさ・・・」

「フーン・・ならいけど」

「弟ぐーん」

「ワツ!・ちょっとお姉ちゃん皆が見てるって・・・」

ギロリッ!

「ヒイツ!・?」

男子共の痛い視線が俺に突き刺さつてくるよ・・・。

「来たわよ」

「ーもう私と弟君の仲を邪魔しないでくださいーってえつー?もう

「こんなとれに・・・」

屋上

「血印開放」！  
×2

「『オルグレイヴサイン』解凍！！ブルーブラッド起動！！・・・どうやら今回も契約者がいないようだな・・・」

一  
お久しぶりね 姪美花さん

さかだち

知っているんだよ。お姉ちゃん

「葉出水瑞音」  
和は自然の血族の女三ツバイ

あの日の約束はなんだつたのよ！」

「アサヒ」の「アサヒ」

「水靈翔波斬！」

「甘いわね。」「葉縁集靈波」！！

卷之二

「オレゴノイブナイ」

「ゴッヂを忘れてます。」「闇十架血印旋」――「」

- 1 -

— 今です！ — 結印崩壊「陣」！！

卷之三

「おひえー！」

「なつ！？なにを・・・」

お如女ヤ人

「新編世界文庫」第一卷

「私を助ける気ね・まあ今度こそ会つたら殺してあげるわ。」

るだけ苦しむにね」

「・・・・・なんで・・・・・」

「一体過去にあの子とお姉ちゃんの間に何ががあったのだろ？・  
これは次の話で・・・。」

続

Episode 4 「過去と今の境界」（前書き）

4

## Episode 4 「過去と今の境界」

「なぜ止めたの！？」

「グス……グス……」

まだお姉ちゃんの悲しみは止まつていなによつだった。

「あの子と何があつたんだよ？話してくれたお姉ちゃん

「弟君……」

なんとか落ち着きを取り戻したようでもうくつと語り出した。

「私、水の血族達と璃音ちゃん、自然の血族達の間では血の同盟が結ばれていた。私達も2年前に約束を交わし合つたの。絶対に自分達どうしで力の奪い合いはしないって。……でも……なんで……なんで……どうしてなのよ！？……」

「お姉ちゃん……」

「あなたが自然のヴァンパイアを殺せないなら私がやるわ」

「待つてくれやー闇羅井さん」

「私に口答えするつもり？奴隸さん」

ボオツ！！

「今はそれどいつもじゃないだろー！」

「ひうつー!?」

俺はグレイヴサインを闇羅井さんに向けた。もうろくな覺いで

「そんなこと言つのなら俺は君を殺すよ？」

「……仕方ないわ。我慢してあげる」

「……」

お姉ちゃんとあの子の絆を取り戻せせる……。やじの子たちを守れるように力を……。

「……一つ条件があるわ

「ん？」

「私と……デートして頂戴」

「はいーーー？」

「おっ・・・・弟君を・・・あなたなんかに渡さない・・・・バタツ！」

「お姉ちゃん！？」

「大丈夫気を失っているだけだから・・・で受けてくれるわよね？」

「はい・・・」

俺には別の意味の試練も迫ってきていた。

続

Episode 5 「トートクロスバニア」（前編）

5

## Episode 5 「トーククロスバナナ」

「…………はあ…………なんでこんな事になるの？」「俺はスケジュール表を見ながら溜息をついた。前回、お姉ちゃんの無一の親友であつたはずの自然の血族のヴァンパイアを戦えないお姉ちゃんにかわって闇羅井さんが戦おつとしたので俺は慌てて止めたのだが闇羅井さんは条件を出してきた。それも…………デートしてほしいと……」

「だからってなぜにデートになるの？」「

「今更取り消しといつのまじよ。あなたは私の…………レ・イ・・なんですかね」「…………分かったよ…………」

今の中はなんだつたんだろ？…………と聞くのはあとが怖いのでやめにした。

「いい・明日のお昼頃、商店街で待つているからな」「あー、はいはい」

（翌日）

「ふぐ・・ひぐ・・・『めんね・・・私のせい』で」「やつと落ち着いたな。謝ることはないわ」「やつぱつあの子と行くの？」

「ああ、じやなことあとが怖いしお姉ちゃんの…………」

「…………」

「じゃあ午後7：30～8時までには必ず帰るから…………行って

きます・・・」

「…………いつていうしゃい…………」

（商店街）

「…………」

「おーい」

「やつと来たわね

「んじゅ・・・

「早速行くわよ

・・・・・

俺達はカラオケ、ゲーセン、美術館その他色々と回った。

「じゃあ、私ちょっと行きたい所があるから1時間後に山口でおち  
あいましょう」

「俺もついていくぞ」

「ついて来ないで！男子禁制！」

「はっ！？」

禁制つて・・・どこに行く気なんぞ？

（1時間後）

「もうそろそろ時間だよな・・・・・ってはいいー！？・・・

俺は突然の驚きと驚愕に目を奪われてしまった。なんと・・・闇羅井  
さんがゴスロリ服だつたからそれと・・・。

「なんだこの人達は！？・・・」

たくさんのオタク男共がたばになつて倒れふしていた。

「吸つたのさ！？」

「この服買つて着替えたらナンパがうるさくて・・・。大丈夫貧血寸  
前の1歩手前になるまでに手加減しておいたから」

「そういう問題じゃないさ！」

「アラ、あなた私に他の男が近寄つていいとでも？」

「・・・・・・

怖いです。その一言に呑き込む。

・・・・・

闇羅井さんとのデートがようやく終わり、家に帰ったのだが・・・

「お姉ちゃん具合は・・・。…?えつ・・・なんで・・・!-?」

お姉ちゃんがいなかつたのだ。窓も全開になつっていた。

続

『おとぎの戦いと傳説』（著者）

## Episode 6 「戦いと再確認」

「……どうしてなのさ……」  
「探さなくていいの？」  
「もちろん探すさ。大切な人だから」  
「…………」  
「その頃」  
「…………」  
「ニヤアー……」  
「君も一人なんだね……」  
「ニヤ！？ シヤアー！」  
「なにどうしたの？……えつ！？」  
「戻つて翌日」  
「…………なんでなのさ！？…………」  
「…………で私にどうしてほしいと？」  
「…………探査能力とかないのかさ？」  
「そんな都合のいいこと考えないことね」  
「そんな……。どうすればいいんさ！？」  
「そうカリカリしないの。……ふせなさい」  
「！」  
ヒュツ！  
「これは」  
「園龍寺姫美香を預かった。返してほしくば力をよこせ」  
「なん……だと……」  
「いくわよ」  
「商店街中央ビル3階」  
「…………」  
「…………かはつ……」  
「姫美香お姉ちゃんを返せえ——！」

「やつときたな。自己紹介しておいで。私は「邪」の血族ヴァンパイアの力ハネ。アンタがオルグレイヴサインの持ち主でありこの子の契約者ね。さあ力を頂戴」

「絶対に渡す気はない」

「ああら。だつたら私の子の血吸っちゃうわよ」

「う・・・弟君・・・」

「絶対に救う！」

「ボオツ！！」

「まだまだこんなものなのね・・・」

「シュー！」

「なに！？」

闇羅井さんの援護が入る。

「私は闇の血族よあなたの力は相殺できる。奴隸さん、私の血の力を使いなさい」

「ああ！「DARK BLOOD」発血！」

「ああ！私にも力が溢れ出してくる「闇鍊双」－－！」

「ザシュー！」

「うおおおおー！」

「ボオツ！！」

「くへ、」

「今よ！「吸血結印」－－！」

「ガブ！チュー！」

「うああああー・・・」

「ふはつ」

「お姉ちゃん」

「・・・弟君・・・」

「なんで家を飛び出したり・・・」

「だつて・・・。だつて弟君が離れていくてしまいそりで・・・」

「俺はお姉ちゃんから離れるなんてことはないぞ」

「・・・・・」

「ニヤアー」

「この猫飼つていいかな?」

「いいわ」

お姉ちゃんが無事でよかつたさ。家族も増えたし。  
続

Episode7 「激化する修羅場ー?」（前書き）

7

Episode 7 「激化する修羅場ー!?

「ヤニア」

「リニヤおいで

卷二

六四  
勿

お姉ちゃんが戻ってきてくれてよかったです。  
でもこれからはんな修羅場があるとは。。。

卷之四

「樂府詩集」

「アーティストで」

一捕まらない程度になら

そんが、さほしないせ

モード

「チツ・・・お楽しみでいいか」

一  
才前

卷之三

「お姉ちゃん達どうしたんさ?」

「…何でもなしけり…・・・」

卷之三

「今田」のクラスに転校してきました辯輝灯です。

「同じく燐輝音架ですわよ」

焼糰羽根美です・・・

一  
五百二十八  
三  
わざ

「超美人三姉妹ときたかあーー！」

「あはは・・・」

「・・・・・・・」

「お・・・・お姉ちゃん？」

「弟君休み時間になつたら早退して」

「はつ！？なにいつてるんさーー？」

「いいから」

俺達は理由も分からずに入退する」ととなつた。でも・・・。

「・・・・・」

「クツ・・・やつぱりですか」

転校生がなぜか俺の家にいた。

逃げるためだつたようだが。

「お兄ちゃん」

「お兄様」

「兄様逃がしませんわよ」

「君達ヴァンパイアなのかぞ」

「キスしよー」

「こ・・・・」これは契約ですからね。べつ・・・別に・・・

「お兄様・・・んー・・・」

「えつ w ちょ w ・・・」

「お・と・う・と・く・ん?」

「ド・レ・イさん?」

「弟君の不潔うーー！」

「私だけの奴隸よ」

「人にビシバシ!ビンタを喰らつてしまつた。

修羅場めえー・・・<sup>△泣</sup>

続

Episode7 「激化する修羅場ー?ー」（後書き）

Episode 8 「不良と感情と覚醒」（前書き）

8

## Episode 8 「不良と感情と覚醒」

「ハア・・・」

またまたヴァンパイアが増えて「しかも全員妹キャラ」修羅場がさらに又激化してしまった。灯は光、音架は雷、羽根美は鋼の血族であつた。「お姉ちゃんに聞いたところ同じ血族同士が結ばれても同じのが生まれることはあまりないらしい」

「ス・・・スマセンでした」

「なにいきなり謝っているのよ?」

ところで俺は生徒会に呼び出されていた。

「いや・・なんかしでかしたつけ?と思つて」

「いやいや、そうじやないのよ園龍寺君に頼みたい事があるの」「嫌な予感・・・」

生徒会長の国田ひろ子は難題な仕事を押し付けることで有名だ。「園龍寺君あなた最近女子数人に囲まれているんですってね。しかも全員転校生。」

「・・・・・」

生徒会にまで噂が広まっているとは・・・。

「だからこの不良女子を更正してもらいたいのよ」

「あまり関係無いような気がしますが・・・つてええつ!?」

生徒名簿を見せられて名前が入つた。

「んげげっ! 真田真由香あー! ?」

学園の伝説・・・。

「無茶さ・・・」

「弟くん・・・」

「女王様キャラはもう!」勘弁を・・・

「私のことかしら?」

闇羅井さんの怒りをよそに俺は続けた。

「これとこつのも修羅場のせいだあー!」

「諦めなさいな。兄様」

「人事だと思つて！とりあえず奮闘してきます・・・」

「うん・・・頑張つてね・・・」

「そして」

「・・・んで・・・なんで才前がついてきているんさー？音架」

「アラ、。兄様を一人で行かせたら心配ですから」

「才前は一体俺をどういう目で見ているんさー？」

「え！？えーと・・・その・・・え・・エッヂで・・ドスケベで・・

シスコンな・・私の・・・」

「ストップ！それ以上言つたなさあー！」

「な・・・なによもう・・・！」

「フン！学園には行かないわ

「やつぱし？」

「これくらいで引き下がつてどうするんですの！？全く・・・」

「アタシの居場所は学園にはない」

「そりゃああれだけ大暴れすれば・・・」

「シツ！」

「とにかくそんな気ないから」

「駄目なんさ・・・そんな生き方は。俺にできぬことだつたら何でもするさ」

「ハア！？アンタ馬鹿なんじやないの」

「言つたばっさ。何でもするつて」

「！それまでは・・つてキヤツ！？」

「オワツ！？お・・音架！？」

音架がなにか勘違いしたらしく俺を殴りつとしてこけて俺とぶつかつた。

「イテテ・・・！？」

「なんだこの柔らかいのは・・・

「！？兄様の馬鹿あー！」

「才前等出でけえーー！」

「・・・・

「・・・・アタシの馬鹿・・・・」

「なら復讐すればいいじゃない」

「誰！？」

「一方」

「音架のせいで状況悪化しちまつたじゃないか」

「兄様のせいですわ！あんなとこに触るから・・・」

「ウグ・・・・」

「翌日」

「才前結局来たんじゃないか」

なんの心変わりなのか真田は来ていた。

「ええ・・・生き方を変えにね・・・」

「えつ！？」

「彼女・・・なにかがおかしいわ」

「なんだって！？まさか・・・」

「放課後」

「さあ、早く来なさい」

「・・・これで私は変われる・・・」

「やはりね」

「真田をどうする気だ？」

「復讐のお手伝いをしてあげているだけ。私に見覚えはない？」

「なんで・・・生きているんだ！？」

ソイツは邪の血族だった。闇羅井さんが倒したはずの・・・。

「まさかを影武者にするとはやられたわ。おかげで不味い血を飲むハメになつたんだから覚悟しなさい」

「真田！才前はソイツに騙されているだけさ。「シチにくるんだ」

「・・・アタシは自分・・・うつん世界を変えるんだこの手で・・・」

「

「真由香さん！」

遅れてきた音架が懸命に呼びかける。

「貴方はただ世界から逃げ回っているだけの負け犬ですわ。目を覚まして！」

「オ前……ウルサイ！ オ前なんかにアタシのなにが分かるつていうんだよ！？」

「それは……貴方の寂しさの感情だけですわね……でもね……貴方は自分から動き出そとしない他人任せで世界を変えられると思つているんですの？」

「そ……それは……今はつきりと分かった。アタシを騙して人殺しをさせるような奴の口車に乗せられてしまつたことを！ 許さない！」

「チイツ！ 「結印開放」！！ハツ！ ちょこざいな死ね！」

「危ない！ 「結印開放」！！ 「雷電超電磁砲」！！」

「あつ……」

「しまつた！ 当たつてしまひますわ」

「俺がいくさ」

「に……兄様一体何をなさるおつもりですかー！？」  
「間に合つてくれえー！」

ドガーン！

「アタシ……こんなところで死んでしまうのかよ？……」

チユツ！

「！！」

「な……なんだとー？？」

「真田！？」

「なんだこの髪は！？」

真田の髪が黒から紅き炎髪に変わつていた。

「お……俺は水の血を与えたさ」

「彼女は炎の血族だつたんですわ！ 1000000人に一人の確率でしか生まれない」

確かに紅き血色は普通の人間となんら変わりがない。

「つていうことは・・・」

「『劫火と轟水の鎖』！！」

「うあああー！」

「今よ！」

ガブリ！

チュー！

（その後・・・）

（・・・）

「目覚めたさ

「気を失っていたんですね

（！！）

グワシ！

「な・・なにを・・・」

「あ・・・アタシのファーストキス返上しろー！」

「ひいー！助けてくれえー！」

「諦めてくださいですわ。兄様因果応報ですわ」（全く・・・人の

氣も知らないで・・・）

これからもますます修羅場が激化しちまつたようだ。

続

## Episode 8 「不良と感情と覚醒」（後書き）

まだまだこれからも続をますよおー！アドバイスと感想よろです。

Episode? 番外編? 「純血な機嫌?」（前書き）

なんというか・・・番外編? っぽい話です。

## Episode? 番外編? 「純血な機嫌?」

「商店街にて」

「…………」

「…………」

う・・・空気がなんか重い・・・まあそれはそうだよなあ・・・。

「戦闘後」

「なんで・・・好きでもない奴にキスされなきやいけないのよ!?」「あれは事故なんだって。つうかまだそんなこと怒つてんのやー?」

「まあ・・・おかげで炎の血族の上にハーフだといひ」とが判明したんですから今回だけは私はなにも言いませんわ」

「別にドレイさんが誰とキスしようが私の知ったことじやないですから」

闇羅井さんはもちろんの「と音架も多少は納得してる」様子で。でも他の皆は・・・。

「弟くん! フーストキスって女の子にひとつ一一番田に大事なんだから」

なぜか熱く語り出したお姉ちゃん・・・ん? 一一番田ー? ジやあ一番田はなんだ!?

「お兄ちゃんそうだよー。」

「お兄様!」

灯達からもせめようがれる。ビーブしてえー?

そして・・・

「はあつ・・・」

今の状況を手短にいうと俺は真田真由香と仲直りするためには強制的に外出させられてしまった。

「これじゃ更正どいらじやないさ・・・」

「せら早くいくわよ。アタシだってアンタと一緒にするのは嫌なんだか

ら

だつたら早く機嫌直してくれ・・・。一体俺の財布をどこまで減らしたらいいんですか！？・・・。  
〔泣〕

「次アレー！」

「もういい！」

「なにつ！？」

もう我慢の限界だ・・・。

「もう一人でどこにでも行けばいいだろ！」

「・・・・フーン・・・アンタもアタシを蔑ますの・・・どこまでも・・・」

「お前はただ人を見ずに逃げてるだけなんさー。」

「逃げてる？アタシが？」

「分からぬいか？ならそれを俺が分からせてやるさ・・・。」

「なつ・・・なにをつ・・・！？」

「大丈夫」

俺はアルバムを取り出し真田に見せた。

「俺の両親は先月突然俺を残して転勤していった。俺は両親を憎んだ。鬼のような委員長に叩き起こされる日〔これが恨み〕が続いた。そしてお姉ちゃん達と出会って俺は分かつたんだよ家族の絆つともんを。お前も・・・」

「だから？『ていうかそれ逆恨みじゃない？』」

「絆を分かれつていう話」

「そつか・・・アタシようやく分かったよ・・・アンタにも人を見る目があるつてこと」

「分かつてねえ・・・」

「ようやく仲直りできたへのか？」。

〔翌朝〕

「ん？」

「おつはー。」

「真田か・・・朝っぱらからなにしにきた？」

「アンタをわざわざ起<sup>ひ</sup>してあげたんだよ文句あっか?」

「・・・・・」

なんだこのフラグ?」

## Episode? 「鮮血の分歧」（前書き）

共通は「」で。次回からヒロイン別にやります。

## Episode? 「鮮血の分岐点」

「なんでお前が『ここにいるんだぞー?』

「別にいいじゃない。鬼委員長よりアタシの方がマシでしょ!う?」  
「なにがしたいんさ・・・」

「あーーーなんで真由香さんがお兄ちゃんを起してこられてるのーーー?」

「弟くんビデイよー」

「あつこれはだな・・・」

「全く・・・」

いつもの日常・・・。

「へえー・・・誰が鬼ですってえー?」

「ヒイーーー?すいません嘘ですーーー!つうか藤倉いつの間にーーー?」

「ふんーとにかく遅刻しないようにしなさいよね不純異性交遊くん  
なに威張つてんだ?つうかなんか絶対勘違いされてる・・・。」

「それはそうと一応だから確認しておくわ今日から海開きだから水  
着忘れないようにな」

「へッ!ー?今日からだっだけ?」

「先生の話聞いてなかつたのー?信じられない!それと・・・」

「言いたいことは分かる」

お前の水着姿を見たいっていう輩はそういうと懇づが・・・。

「ならいいわじゃ

鬼の嵐が過ぎ去り・・・。

ちなみにこの学園に服装の規制は特にない。だからこそ男の血が  
騒ぐ・・・。

「これはチャンス!・・・」

「弟くんに・・・」

別なにかが始まろうとしていた。

「水着か・・・」

俺が見たいと想つのは  
・・・。

## Episode? 「鮮血の分岐点」（後書き）

次回ヒロイン別に妄想が入り乱れる・・・ふはっ！ ｛

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0985n/>

---

ORUGUREIVE BLOOD VAN PAIASA IN HEARTS」

2010年10月10日13時25分発行